折口信夫の師弟関係

—「かたる」行為と聴く構え—

学校教育開発学コース　齋　藤　智　哉

Relationship between mentor and students (SHITEI-KNAKEI) of ORIKUCHI Shinobu:
Act of narrating and posture of hearing

Tomoya SAITO

The purpose of this paper is to clarify relationship between mentor and students (SHITEI-KNAKEI) of ORIKUCHI Shinobu (1887-1953) by focusing on act of narrating (KATARU) and posture of hearing. The act of "KATARU" by ORIKUCHI means education itself. Therefore he educated his own students by narrating. There were two ways in this educational approach. One was narrating approach in his lecture at KOKUGAKUIN University and KEIO University. Another was dictating approach about his works by the only one student who lived with ORIKUCHI to become his successor. These ways were impregnated through his narration without failing to catch only one word. The students studied his mentor's way of thinking, emotional attitude, and sensuous of body. This way of careful listening was useful not only for his mentoring but also for his own learning.

目　　次

はじめに
1．「かたる」行為の意味　—「言語情調論」をてがかりに—
　A．折口信夫における「かたる」行為
　B．「言語情調論」と聴く行為
2．「かたる」行為による教育　—かたる・聴く・身体感覚の共有—
3．聴く構えと模倣
おわりに

はじめに

本稿の主題は，国文学者の折口信夫(釋迢空，1887-1953)の師弟関係を，「かたる」行為に焦点を当てて解明することである。近代という時代の中で師弟関係にこだわり続けた折口は，「かたる」ことによって弟子を教育した。学問と生活が渾然一体としていたと評されるように，この「かたる」という行為は，折口の国文学研究の中で，重要な動詞として位置を占めている。折口の師弟関係は，師が「かたる」ことで教育を行い，弟子は聴くことによって学ぶ。この具体相を，本稿では主に身体の構えに着目し，折口の思索に従う形で記述をする。以上のことを次の構成で明らかにしていく。

まず第一章で，折口が用いる「かたる」行為の意味を確定し，卒業論文の「言語情調論」をてがかりに，「かたる」行為と聴くことの相互性を明らかにする。第二章では，第一章で明らかにしたことをもとに，折口の弟子教育について記述をする。最後に第三章では，弟子としての折口が，徹底して聴く行為を学びの方法としていたことを，柳田國男との関係において明らかにする。

1．「かたる」行為の意味　—「言語情調論」をてがかりに—

A　折口信夫における「かたる」行為

折口信夫は国文学者，民俗学者，歌人として知られている。いわゆる折口学は，実感によって構成されるため，時には論理の飛躍を産み出し，理解を難しくしている。本稿における「かたる」行為の解明は，そのよ

うな難解さを更に複雑にするものではない。

「かたる」行為は，折口の学問や創作，そして師弟関係に通底する方法と言ってよいだろう。とりわけ師弟関係においては，師の立場であれ弟子の立場であれ，その行為の力を存分に活かした教育，あるいは学びがあった。古くは語部に象徴される「かたる」行為は，伝承世界における中心的方法であり，教育の方法として用いられた。近代になると，伝承や教育の方法というよりも，声が持つ権力性によって，国民国家の創出と不可分な形で力を発揮した。講談師や説教師などが好例だろう[1]。しかしながら折口は，近代においても「かたる」行為の教育力を信じて実践した。

「まれびと」「常世」「ほかひびと」「貴種流離譚」などといった折口名彙の中に，「かたる」という言葉は含まれていない。また，「かたる」を主題として扱った論文も存在しない。しかし，多岐にわたる折口学の探究課題を仮に国文学の発生とした時，その始原に「かたる」という行為を見出すことができるのではないだろうか。実際「かたる」の多くは，語部の歴史を始めとする物語関連の論文の中に出てくる。さらに，それらの関連論文に立ち入ってみると，語りという名詞ではなく，「かたる」という動詞のままで用いられている。すなわち，折口は従来の語り論や物語論のように語りの内容に焦点をあてるのではなく，「かたる」という行為や所作に着目していたと言えるだろう。

折口が用いる「かたる」という言葉は，およそ次の四つの意味に分類される。①騙るという「だます」の意味，②感染・感化などの「教育」の意味，③「かたる」(叙事的)と「うたふ」(叙情的)の内容区別，④特別な意味が付与されない，の四つである。これらのうち④にあたるものは「かたる」の意味に影響を及ぼさないので，検討の対象から省くことにしたい。①から③の代表的な例を確認し，それぞれについて明らかにしよう。

①「かたられる」といふことは，「だまされた」といふことです。(中略)昔の「語る」といふ語(コトバ)も，その語を発声してゐると，自然にその語の誘惑で，その語に心が牽かれて来る。即，さういふ風に歌ふことを，「かたる」といつた。だから「騙られる者」といふのは，つまり他人(ヒト)の心をば化する，他人の心をば導く，他人の心をば自分の思ひ通りにするといふやうな意味なのです。昔の人の考へでは，古くから伝つてゐる詞章を以つて，今の世の人を導く，今の世の人の心を変へて行く，さういふ意味なのでした。自分の思つてゐるところへ導いて行く，だから教育すると同じことです[2]。

②其れ(「騙る」引用者注)よりももつと根本的に持たれて居たらうと思はれるのは，「感染」せられる，「感化」せられると言つた風の意義中心から出る用語例である。(中略)ある連続を持つた言語が，対者の魂に働きかけて，ある変化を惹き起こす事である。つまり，さうした結果の予想を以て言ひかけられた時，その魂は，言語の媒介によって，発言者の意思に感染するのである。(中略)其が，社会の秩序を整える手段と考へられる様になつてからは，次いで又其を以て，社会的知識を授与する唯一の方法と考える様になつた。だから，「かたる」事は，教育・訓諭と目的を同じくした行為を内容として居たのである[3]。

③日本の歌謡史に一貫して，其声楽方面の二つの術語が，久しく大体，同じ用語例を保ちながら行われて居る。かたるとうたふとが，其だ。旋律の乏しくて，中身から言へば叙事風な，比較的に言えば長篇の詞章を謡ふのをかたると言ふ。其反対に，心理律動の激しさから来る旋律豊かな抒情傾向の，大体に短編な謡ひ物を唱へる事をうたふと称して来た[4]。

①は「騙す」意味で「かたる」が用いられている。「かたる」主体がある言葉を発すると，自らが客体として言葉の力に誘惑され心を奪われてしまうことから，「かたる」行為には聞き手を導く力があるとし，教育と同じだとする。

②は①の意味の根底にあるものとして「感染」「感化」の意味が挙げられている。発話された言語が連なる事で，聞き手の魂を揺さぶり変化を起こし，語り手の意図する方向に聴き手を導く。しばしば折口の弟子教育の特徴として言われる「感染教育」[5]は，この意味に由来する。

③は「かたる」と「うたふ」の語義の違いを示している。旋律が少なく内容が叙事的な場合を「かたる」とし，旋律豊かで内容が抒情的な場合を「うたふ」とする。

以上の三つの意味は，次のように相互に関連している。「かたる」ことで聞き手の魂を揺さぶり，話し手の意図する方向へと導くが，時には「騙す」ことにもなる。この時，いずれも教育に結び付けている点が，折口の特徴であろう。そして③は，表面上の語義の違いを示しているだけでなく，具体的に「かたる」方法を提示し

ている点で，①②と関連する。このことは，次の折口の言葉からも明らかである。

> かたるは権威を持つて対者の霊を感染せしめる—かたる・かたらふ—誘惑力ある詞章を述べる方法を言ふので，内容的には叙事的であり，音楽的には律の変化の少ない方法である[6]。

折口が導き出した「かたる」行為の意味が，国文学研究において特殊ではないことを確認しておきたい。藤井貞和は『物語文学成立史』(東京大学出版会，1987年)の中で，『古事記』『日本書紀』『万葉集』における「語る」の全使用例から，「カタリ・カタル」の語義を確定した。藤井は十五通りの用例に腑分けをし[7]，さらに大きく「(a)出来事を報知する(非現場性を特徴とする)(b)熱心に問いかけ，説得し，慫慂して，相手を動かす」[8]の二つにまとめることができると言う。「かたる」行為に教育の意味を持たせることが折口説の範囲を出ないにしても，少なくとも聞き手に何らかの変化をおこす力があると考えてよいのではないだろうか。

しかし，「かたる」は教育の意であるとする折口説が，国文学研究の上で支持されるかどうかについては，保留せざるを得ない。例えば，「ものとは，霊(モノ)の義である。霊界の存在が，人の口に託して，かたるが故にものがたりなのだ」[9]という広く知られる折口の物語論は，「ものがたりの『もの』が霊魂を意味する，と認定できる確実な例は古代に一例も見つからない」[10]と藤井によって退けられている。折口の学問は，実証的ではないとよく言われる。それは，万葉集や古事記などを暗誦していたため，すなわち，それらが折口自身の血肉となって身体に沁み込んでいたために，実感として湧き上がっているためではないだろうか。本稿では，折口の師弟関係を扱うことが主題であるため，国文学や民俗学において正しい解釈であるかは問題とせず，折口に従って考察を進めていくことにしたい。

B 「言語情調論」と聴く行為

「言語情調論」は，折口の卒業論文として明治四十三年に國學院大学に提出された。未完のまま提出され，生涯にわたって完結することはなかった。この論は，言語学に基づいた短歌論とも言えるが，「言語情調はもともときゝての意識界にあることで，はなしての側におこつた直接情調が，言語形式を通じてきゝての側に再生したものである」[11]とあるように，聞き手に焦点を当てた言語論として捉えることができる。つまり折口は，前節で考察した「かたる」行為に先立って，聴く行為を主題化していたのである。師が「かたる」行為によって教育を行うとすれば，弟子は聴くことによって学ぶと言える。よって，折口の師弟関係を解明するためには，「かたる」行為の意味と同様に聴くことの意味も明らかにする必要がある。以下，「言語情調論」の記述に従って，聴く行為を明らかにしていこう。

この論文の最終的な目標は，言語の直接性を明らかにすることにある。そのために，「畢竟言語の百般の事象に対する関係は，一の符号にすぎない」[12]とする，言語の間接性から考察が始められた。「言語表象の完成は，声音の輻射作用によつて，観念界に仮象をうつし出すことによってえられる」[13]が，仮象は「経験から来る実感の連合によつて浮き上らす類化作用」[14]によってもたらされる。つまり，声という媒介が入ることによって，言語表象は聴き手の経験に大きく左右されてしまう。したがって「言語には，必，あひての予定」があり，「そのあひてに自身の主観より推しておのが感情，意志に比較的近いものを意識せしめることが必要」なので，話し手には聴き手を意識することが要求される[15]。

「あひて(聴者又は読者)と自身(はなして又は作者)とが対立した場合には，必ある約束がなりたつべきはずである。言語はこの約束によつて出来た予約物である」[16]と折口は述べる。いくら聴き手の経験に依拠しているとはいえ，「言語は概念的存在」[17]である以上，話し手と聴き手の間にある一定の共通理解が存在していなければ，意味内容の伝達が不可能になってしまうからである。しかし，「その外延はきはめて広いものであるかわりに，内包の区分性ははなはだ朦朧たるものとなることは免れがたい」[18]という状態が生じてしまう。このような状態として考えられる，一度も経験したことがない新たな経験をする場合には，どうなるのであろうか。折口は，ある程度まで発達した言語を持つ社会では「経験界のある事象と類似関係を見出す観念連合の作用」[19]によって，既存の経験界に新たな経験を取り入れてしまうという。つまり，あらかじめ規定されている意味を，経験や現実に即して組み替える事で，新たな意味を生み出すということである。あるいは，聴き手の経験を刻みなおすと言ってもよいだろう。ところが折口は，以上のような言語の間接性は不便であるとし，言語の直接性を探る。折口が言語の直接性にこだわるのは，以下の問題意識による。

> われらの言語文章は常に機械的で，一つの言語文

章はどんなことがあつてもつくりつけた様なたゞ一つの表象より外に持つことの出来ぬはずである。ところが人間は活物であるから感情がある。意志の表出をすると共に，感情の表現もまた一つである[20]。

折口は人間の感情がいかにして言語で表現されているのかについて，媒介物であった声に着目し，声音が感情を伝えているとした。そのことを明らかにするために，言語の作用を「(イ)類化作用(ロ)表号作用(ハ)音覚情調」[21]の三つに分ける。それぞれ簡単に説明をしておこう。(イ)の類化作用は，人間が言語の意味を確定する時に，経験によって蓄積された諸観念の中から類似したものを選択して照らし合わせることを言う。(ロ)の表号作用は，ある言語が類化作用を働かせることなく，一対一対応のようにすぐに思い浮かべることである。(ハ)の音覚情調は「もし言語が意味だけを述べてこの音覚情調を有せないものとすれば，人ははなしての意志を知ることは出来ても感情を感受することはおぼつかない」[22]という仮説に基づいて出された作用であり，「一音に音質音調音位音量などから来る特別の情調があり，一句一文にはその他に音脚音の休止などの影響があつて特殊の情調を喚起する」[23]という言語の働きを示す。

さらに，それぞれの作用を惹き起こすものとして，言語を「(イ)連想言語(ロ)象徴言語」[24]の二つに分け，言語の直接性を導き出そうとする。連想言語は類化作用と表号作用を惹き起こし，象徴言語は音覚情調をもたらす。連想言語は，「言語は意識作用の符合である」[25]という間接性を出発点としている。たとえば，我々は，「わんわん」を類化作用によって犬の鳴き声だと判断している。この段階で「わんわん」はいまだ連想言語であるが，犬の鳴き声だと判断するまでに殆ど時間はかかっていない。このように，見たらすぐにわかる表号言語となっているものは，「立派に直覚性を有している」[26]と説明する。折口が目指す言語の直接性は「もとゝゝ間接性を有する言語である，自然努力の結果獲得した直接性」[27]というように，言語の間接性に立脚している。

これに対して象徴言語は，知性よりも気分にかかわるもので，この気分の伝達が可能になることによって，言語は初めて直接性を有することになる。つまり「気分をあらはすにはまづ，その形式より，ある情調をひきおこすことが第一の要件」[28]であり，音覚情調の作用が不可欠なのである。連想言語と象徴言語という二つの言語の形式は，「ことさらに連想言語と命(なづ)けたけれど，象徴言語にも全くこの作用はない訣ではない」[29]というように，排他的なものではない。それぞれ言語が持つ一側面である。

言語の意味は，聴き手の経験に大きく左右されることからもわかるように，主観性と客観性のいずれかを全く排除することは不可能なので，主観も客観も含みこんだ包括的な言語が理想となる。そこで，主観と客観という二項対立的な思考様式を，折口は次のように乗り越える。

こゝに姑く哲学上の絶対観を論ずる必要が生じた。哲学者は，絶対と相対とを対立して宇宙意識の二範疇となして居る。しかし自分は，いま一つの立場があると思ふ。それは観察点によつて或は相対界に属するものとも，或は絶対界のものとも，見ることの出来るものが屡ゝ見えるのである。それは著しく個性的で，しかもこれに対する認識法の極めて複雑なもので，その性質上一見絶対風に見えるものをいふので，その価値は主観に存して客観的には乏しいものである。たとへば個性の極端に拡充したもの，或は主客観の混合甚しくてほとんど分かつべからざるものゝ如きはこれである[30]。

現実世界は完全に主観と客観に二分されてしまうものではなく，主客未分の状態も存在するのではないだろうか。いわば間主観的な世界も存在するのではないかということであろう。折口はその状態を仮絶対と名付けた。仮絶対は第三者から見ればきわめて曖昧なために無意義となる。無意義な言葉は，音覚情調の力によって第三者にとって暗示的なものへと変化し，最終的に象徴的な言葉になると折口は考えた。

さて，今までは言語が持つ気分のうち，音覚情調に限定して考察を進めてきたが，ここからは言語情調全般について検討をしよう。折口によれば「言語情調はもとゝゝきゝての意識界にあることで，はなしての側におこつた直接情調が言語形式を通じてききての側に再生したもの」[31]である。「言語情調の意識の所在は主観にあるけれど，これを規定するものは客観である」[32]という点に注意しなくてはならない。話し手の気分を聴き手が受け取った時，その気分を聴き手の主観が規定するとしたら，話し手の感情は伝わることなく，聴き手の勝手な感情でしかなくなってしまう。そこで折口は，情調伝達の形式を以下のように捉えている。

はなして(主体)・・言語・・きゝて(対境)
(中略)
きゝて(主体)・・言語・・はなして(対境)[33]

折口は，人が言葉を発した時に，上記の二つの主客関係が同時に存在すると考える。聴き手は，言語を形式的に捉えることと同時に，情調を話し手の声の音質・音量・音調・音脚・音の休止・音位を手がかりに，自らの中に再生することになる。情調は気分であるが「ある観念に粘着結合して，之を離れることはもとより，他の観念によつて遷移せられることもない」[34]ので，可変的な感情とは違う。よって，話し手の情調は，聴き手の経験に照らし合わせた観念連合による再生感情として経験されるため，聴き手も主体となる。

以上の考えを折口は，心理学者が「言語表情と身体表情と情調の一致をいうて居る」[35]ことを根拠とする。高橋直治によれば，折口は島村抱月の「心身並行論」の影響を強く受けている[36]。話し手と聴き手の間に主客未分の状態を想定していることを踏まえれば，心と身体のいずれかが主導権を握るわけではないとする心身並行論の立場に折口が立っていたことは自然である。

上述のことから，折口にとって「かたる」ことと「聴く」ことは，分かちがたく相互に影響を及ぼしあう行為であったと考えられる。また，言語の間接性を，声音を媒介にすることによって直接性へと導こうとしたことで，言葉と身体の関連性に気づいたと言ってよいだろう。声音によって表現される感情は，話し手の身体感覚と結びついているということに他ならない。また，聴き手は話し手の情調を再生するが，これは，話し手の身体感覚の再生でもある。折口の師弟関係に即して言い換えれば，「かたる」行為は話し手の意図に聴き手を感染させる点において教育的であり，聴く行為は話し手の身体感覚を自分の身体に重ねることなので，学びの方法として聴く行為を重視することになるのである。

2．「かたる」行為による教育　―かたる・聴く・身体感覚の共有―

師としての折口は「かたる」ことで弟子の教育を行う。折口の弟子たちは，「家の子」として折口の自宅に住み込む一人の弟子と，そうでない弟子に分れる。家の子ではない弟子たちは，大学の講義と短歌によって人格の鍛錬を目指す鳥船社での活動を中心に，折口から学んだ。一方，家の子はこの二つに加え，折口の著作の口述筆記を行った。以下それぞれについて検討をする。

折口にとって大学の講義は，教育の場だけでなく研究の場でもあった。折口は「かたる」自らの声に魂を揺さぶられることで，新たな着想を得る。このように，講義では常に新たな意味が生まれてくるので，たとえ周りから金魚の糞と言われようとも，弟子たちは大学を卒業した後も，出来うる限り全ての講義に出席した。そして，ただ聞くだけでなく，師の言葉を一言も漏らさずにノートに書き取った。例えば池田彌三郎は，折口の講義に二十年間出席した結果，書き記したノートの量を原稿用紙に換算すると全部で一万四千枚にのぼるという。池田の回想を見てみよう。

先生の話は，一見，横道，むだ口，雑談と聞こえる部分が，実はそうではなく，その部分が部分として存在せず，常に全体の中に，どっしりと座を占めているのである。(中略)たとえば，AからBへ，BからCへ，と話が進んでいく。すると突然，Pが出て来る。CからPへは，橋掛かりも何もない。筆記の手を休めて聞いていると，PからQへ進み，それが突如として，Cの続きとしてのDへ，Qから続いていく。あわてて，Dから書きはじめても，もうだめである。PもQも，はずすことのできない部分だったのである。D・E・Fと進んでいくためには，肝腎な段取りだったのである[37]。

雑談のように聞こえる話は，折口がまどろみながら思考している「かたり」であり，新たな意味を生み出す手がかりとなっている。手品のように関係ない話から突然出てくる結論とは違う。確かに，結論を聞いた瞬間は，騙されたように感じるかもしれない。しかし，騙す意味での「かたる」も，折口に従えば最終的に教育することと同じであった。漏らさずに聴こうとすること自体が，すなわち折口のゆるやかで静かな「かたり」に身を任せて聴く身体の構えを作ることそのものが，結論に至るプロセスを共に辿ることであり，弟子にとっての学びなのである。前章で検討した「かたる」ことと聴くことの相互性を踏まえれば，折口の教育の根幹には，師の身体感覚を弟子に実感させることがあると考えられる。とするならば，必然的に弟子の身体性も問われることになるので，講義の雰囲気が生理的に気持ち悪いといって離れていく学生が少なくなかったことも首肯できる。決して折口の所作が女性的なことへの嫌悪感だけではないだろう。折口の感染教育は，まさに身体感覚から変えてしまうことだと言えよう。この

ように考えると，弟子たちが折口の真似をすることや，逆に折口が弟子たちを丸坊主にしたり，自分と同じ丸眼鏡をかけさせることは，親密さの表現を遙かに越え，感覚の共有を目指していたと言えるだろう。

口述筆記では以上のことが，よりはっきりした形であらわれる。従来の研究では，頭の回転スピードに手が追いつかないので口述筆記を始めたと考えられている[38]。確かに発端はそうかもしれないが，「かたる」行為に注目すると，弟子を教育するためだと考えることも可能である。晩年の折口と生活を共にした岡野弘彦は，口述筆記に慣れてくると「こちらも気持のゆとりが出来て，その話しぶりや間の置き方から，文章の奥の先生の心理が伝わってきて，たいへん濃密で贅沢この上もない心の伝承を受けているのだという気がしてくる」[39]と回想している。いわば密閉された部屋に弟子と二人きりで向かい合って口述筆記を行うと，新たなものが生まれてくる時に感じる自分の心の動きや機微といったものを，より一層，間身体的に共有できる。まさに，声によって直接的に情調を弟子に伝えることができる空間となっている。お互いの息遣いが感じられるほどの距離で語り語られ，折口は自らの思索を展開していった。更に岡野は，次のように言う。

> 二人だけで差し向かいで口述筆記していると，こちらは口に出さないがひそかに対話しているような気分になってくる。ましてこんなふうにはっとした表情が思わず出て，なかったはずの言葉をさそい出すこともあるのだ[40]。

折口が眼前にいる岡野の表情をただ見ているだけでは，思考に影響はないだろう。なかったはずの言葉が出てくるということは，もはや身体感覚の上で折口は，自他の区別がつかなくなるほどに身体が膨張し，岡野と浸透し合っていたのではないだろうか。そして，岡野さえもが，自分の言葉だと思い始めるほど折口の語る言葉に感染し，二人は魂を揺さぶりあっていたのであろう。このことこそが，折口が目指す師弟関係における教育だったのである。

折口は，家の子とそれ以外の弟子を，あからさまに差別していたわけではない。鳥船社での短歌指導や旅を通して，口述とほぼ同じ効果がある教育をした。「言語情調論」に従えば，象徴言語が情調を伝える役割を担っていた。この象徴言語を多用する短歌は，折口の情調を弟子に伝え，弟子の情調を折口が感じるのに最も適している。ゆえに，短歌の得手不得手を問わず，弟子を鳥船社に入れて指導することで，身体感覚の伝承を企図したのだろう。弟子の歌の大半は，添削を繰り返すうちにほとんど原型を失い，折口が詠んだ歌になってしまう。しかし，家の子にしか行わない口述筆記のかわりに，そのやりとりを通して，知識に偏ることなく身体次元からの教育を試みていたのである[41]。

3．聴く構えと模倣

折口にとって，弟子という立場は「学問の系譜の中に自分をおく」[42]ことになるため，学ぶために重要だという認識があった。折口は，幼い頃から弟子入り願望が強く，絶えず師を探し求めていた。実際には，敷田年治・三矢重松・服部躬治・柳田國男の四人を師と仰いだ。とりわけ國學院大学で三矢重松から受けた影響は，国学観のみならず師弟観をも決定付けた。学行一致の師弟関係である。折口は，自分の弟子たちとは，前章で見たような師弟関係を実践しながらも，柳田國男とだけは結ぶことができず，弟子として扱ってもらえないもどかしさを感じていた。柳田が必要としたのは，「同志の全国にわたつて数を増すことが，其為に一層望ましい」[43]と言うように，民俗学を発展させるための同志であった。その背景には，「師匠なら弟子の面倒は，どこどこまでもみるものだ。(中略)私には，ひとりだって弟子なんてものは居やしない」[44]という考えがある。民俗学の発展のためにはあまりに時間が足りなく，弟子の面倒までみている暇がないということなのであろう。そこで折口は，私淑することを選択した。折口の柳田に対する態度は，『古代研究』「追ひ書き」の中に最も顕著に現れている。

> 先生の表現法を摸倣する事によつて，その学問を，全的にとりこまうと努めた。先生の態度を鵜呑みにして，其感受力を，自分の内に活かさうとした。私の学問に，若し万が一，新鮮と芳烈とを具えてゐる処があるとしたら，其は，先生の口うつしに過ぎないのである。(中略)不肖ながら，其直門として，此新興の学徒の座末に列する事の出来た光栄を，不思議とさへ考へることがある。(中略)私は先生の学問に触れて，初めは疑ひ，漸くにして会得し，遂には，我が行くべき道に出たと感じた歓びを，今も忘れないのでゐる。この感謝は，私一己のものである。(中略)学問上の伝襲は，私の上に払ひきれぬ霾(ヨナ)の様に積もつてゐた。此を整頓する唯一の方法は，哲学でもなく，宗教でもないことが，始めてはつきりと，

心に来た。先生の学問の，まづ向けられた放射光は，恰も，私の進む道を照らしてゐたのである[45]。

ここには，弟子としての基本的な構えが三点示されている。系譜に連なること，模倣すること，謙虚になり誠実であることである。一点目からみていこう。

一点目は，ある系譜に自分を連ねることによって，自分の意義と立場を明確にすることである。「直門」という表現によって自分の立場を限定している。柳田の民俗学は「恰も，私の進む道を照らしてゐた」と言うほど，研究の方向を見失いかけていた二十代の折口を救い出す光源であった。この表現からも，学行一致というような，学問上でも人間的にも師と仰ぎ育ててもらいたい欲望が抑えがたく折口の中に渦巻いていることは，想像に難くない。しかし，柳田との間に横たわる，決して出会うことのないほどの師弟観のすれ違いと隔たりに，折口が見出した一つの妥協点が私淑することだったのである。

私淑することは，柳田に対して迷惑をかけない。二人が関わる機会は，雑誌投稿や郷土会，談話会などの研究会，柳田邸を訪れること，余技として連句を捲く時が中心であった。数少ない機会を活かすには，徹底して模倣するほかに手段がなかった。これが二点目である。「全身を耳にして」という言葉があるように，まさに身体全体で聴き，模倣したのである。「先生の口移しに過ぎない」と述べていることからも，折口が柳田のかたりに徹底して感染しようとしていたことが窺える。

折口が学問だけでなく，柳田の身のこなしまでも徹底的に見ていた例として次のものがある。柳田一門と虚子一門で連句を捲くことになった時，折口は同伴した加藤守雄に「先生はいつも，幸田露伴さんの袴さばきが見ごとだとほめていらっしゃった。きっと見覚えて，それをなさるにちがいない」[46]と耳打ちした。加藤は柳田の動作を見て，次のように記している。

柳田先生は座の中央で，ていねいに挨拶され，正面にある座布団に直る時，さっと袴のすそをさばいて，体を半回転なさった。見ごとな動きだった。ああ，これだなと私は思った。こういうことを見習うのも，師承のうちなのだ，と知った[47]。

折口はどんなに些細なことでも見逃さないことで，人間としての生き方も学ぼうとしていたのである。加藤が言う「こういうことを見習うのも，師承のうちなのだ」ということを常に実践することで，理想とする学行一致の師弟関係への転換を図ろうとした。その為には，見逃さない聞き逃さないという意識だけではなく，常に自分のこととして一緒に同じことをする身構えがなければ難しい。聴く構えは常に主体性が問われる在り方のため，持続力と忍耐力，そして師に対する誠実さと謙虚さを必要とする。聴くことによって学び，模倣することで自分のものにすることは，単純に真似てなぞることではない。ある対象に対した時に，柳田ならばどのように考えるだろうという試行錯誤を，絶えず繰り返していく中でしか身につけることができない。折口が柳田の身のこなしまで熟知していたことは，昭和二十五年の秋に柳田と一緒に伊勢から大和・大阪・京都にかけて旅行をした時のエピソードからも窺い知ることができる。

柳田先生の白足袋のつま先が，草履のきつい鼻緒に入りにくいとき，そばで靴をはいておられる折口先生が，つと手を添えられることは何度かあった。それはいかにも自然な姿であった[48]。

この様子を見ていた神主たちの間では「見事というかなんというか，あの師弟はすごいものだ」[49]と長い間，話題になっていた。まさに柳田が鼻緒に親指を通そうとする時に，風景に溶け込むような自然さで折口が「自分の指で鼻緒を広げ」[50]ることができるのは，常に柳田の動きを自分の動きとして捉えていなければ，到底できることではない。

このような動きが三点目に挙げている，弟子としての謙虚さと誠実さの具体例といえるだろう。しかし，時として謙虚さが行き過ぎて，柳田の前で語れなくなってしまうことがある。その語れない様子を，岡野は次のように表現する。

講演会やシンポジウムの場で，折口の怒りを誘って冷たい炎のような論難を受けた人が，何人か居るはずである。その折口にわずかな例外があった。国学の師の三矢重松と民俗学の師の柳田國男に対しては，そばに居る者がじれったくなるほど鞠躬如として，言うべきことも何も言わなくなってしまう。信頼し敬愛する人への徹底した心の誠実を示すのであった[51]。

徹底して「かたる」ことによって弟子を教育した折口は，弟子の立場になると一変して「かたらなく」なる。

物が言えなくなる原因は主に「寃屈を忍ばねばならぬ威力の抑圧を受けた時」「心中の巨細を委らかに述べらぬ焦心」「表現不能の場合にも，又自分の発表の無視せられ，緘口せられた外的の力の加つた場合」だと折口は述べる[52]。三矢や柳田に対して物が言えなくなる理由は，二番目の「心中の巨細を委らかに述べらぬ焦心」だと考えられる。無論，様々な状況において語れなくなる状況があるだろうが，三矢や柳田に対する場合，謙虚さが「奴隷習性」[53]という習慣によって「かたれない」状況に折口を追い込んだのだろう。しかし折口は自分の癖をよく知っていた。物が言えないことは一見するとマイナスであるが，逆に学ぶために利用したと言えないだろうか。「かたらない」ことは聴く事でもある。折口は，何も言えなくなる状況を，卑屈にならずに相手がかたる言葉を徹底して聴くことによって，相手の言葉の力に感染し，自らを高めようとしていたのである。

おわりに

折口にとって，「かたる」行為は弟子を教育する方法であったこと，また，聴くことは学びの方法であったことが明らかになった。両者の相関は，声に着目することによって，「かたる」主体と聴く主体の身体が問われ，より明白なものとなった。

しかし，折口が「言語は社会の製作物である。言語の内包には群集心理の潜在して居るのを見る。(中略)言語の本質から言語情調の起源を論ずれば，社会情調に到達せなければならぬ」[54]と述べていることに注意しなくてはならない。言語情調は音覚情調によって気分や感情を直接伝えることだけではなく，社会の雰囲気まで伝えることを，折口に紛うことなく認識していた。「かたる」行為が，聴き手の身体感覚に深く影響を与えることを加味すると，ナショナリズムとの関係を解明する必要性が生じる。折口研究の中で数少ない批判的研究を行っている村井紀が，「私にとり折口信夫研究は，日本ファシズム研究なのである」[55]と述べているように，丁寧な実証的研究が必要とされる。とりわけ「かたる」行為と聴くことに関しては，今後の課題として，隣接諸分野を射程に入れた理論研究の必要性がある[56]。

最後に，折口の師弟関係において，「かたる」行為と聴く構えが教育方法として十分な効果を発したことは，「かたる」行為の積極的側面として捉えることができる。しかし，学びの方法として「聴く」ことの重要性を考えるとき，実存にかかわる部分だけではなく，身体のポリティクスを視野に入れる必要性があることの示唆を本稿で得ることができた。

（指導教官　佐藤　学教授）

註

1)例えば，兵頭裕己は『〈声〉の国民国家・日本』(NHK ブックス，2000年)で，明治から大正にかけて席巻した講談師・桃井軒雲右衛門のかたりが，人々の心を捉えてはなさなかった様子を，国民国家の形成と関連付けて論じている。
2)「上代文学」『折口信夫全集 5』中央公論社，1995年，187-188頁。
3)「口承文学と文書文学と」『折口信夫全集 5』中央公論社，1995年。163-164頁。
4)「国文学の発生(第四稿)」『折口信夫全集 1』中央公論社，1995年，147-148頁。
5)例えば，岡野弘彦『折口信夫伝―その思想と学問―』(中央公論新社，2000年)に収録されている「四　力ある感染教育」などがある。
6)「民俗学」『折口信夫全集19』中央公論社，1996年，161頁。
7)「(a)説得(コトと連関)(b)「神話」，芸能的な語り(c)使嗾，説得(d)説得(コトと連関)(e)出来事の報知(コトと連関)(f)出来事の報知(コトと連関)(g)出来事の報知(h)(i)出来事の報知(コトと連関)(j)説得，反逆の使嗾(k)芸能的な語り(l)カタラフ(m)発問(n)「天語歌」，芸能的な語り(o)ひとをあざむく『語り』」の十五通りである。(藤井貞和『物語文学成立史』東京大学出版会，1987年，312頁)
8)藤井貞和『物語の起源―フルコト論』ちくま新書，1997年，141頁。
9)「大和時代の文学」『折口信夫全集 5』中央公論社，1995年，26頁。
10)藤井貞和『物語理論講義』東京大学出版会，2004年，8 頁。
11)「言語情調論」『折口信夫全集12』中央公論社，1996年，70頁。
12)同上，42頁。
13)同上，41頁。
14)同上，41-42頁。
15)同上，42頁。
16)同上，43頁。
17)同上。
18)同上，43-44頁。
19)同上，45頁。
20)同上，69頁。
21)同上，47頁。
22)同上，48頁。
23)同上，49頁。
24)同上，50頁。
25)同上，51頁。
26)同上，52頁。
27)同上。
28)同上，55頁。
29)同上，50頁。
30)同上，57頁。
31)同上，70頁。

32)同上。
33)同上，70頁。
34)同上，71-72頁。
35)同上，84頁。
36)高橋直治『折口信夫の学問形成』有精堂，1991年，43-57頁参照。なお，島村抱月は心身並行論を「凡そ如何なる心界の活動といへども，肉身に之れと相呼応し相並行するの活動あらざるなく，凡そ如何なる肉身の活動といへども，心界に之れと相呼応し並行するの活動あらざるはなし。…一般の原理としては，心身かならず並行すといふの外なかりき」(『抱月全集　第四巻』天佑社，1919年，332頁)のように説明している。
37)池田彌三郎「とったノートが一万四千枚」『文藝春秋』文藝春秋社，1971年1月号，179頁。
38)村井紀は，折口の口述筆記をバフチンと類比しポリフォニックに捉えている。筆者の見解と通じるところがあるので，該当箇所を引用しておく。「折口のテキストは『他者』に筆記させることで『折口』という『主体』の『検閲』を退け，そしてひとつの『主題』による専制を免れ，複数の『主体』と多数の『主題』とを獲得している。つまり折口のテキストは『他者の言葉』であって，『対話』であり，『多声的』(ポリフォニー)なのである。むろん『他者』の筆記にも『検閲』は働いている。しかし，ここには超越的な『主体』はいない。バフチンのいうトルストイや『定本』という，『検閲』をした柳田国男のテキストとは異なるのである」(『反折口信夫論』作品社，2004年，91頁)
39)岡野弘彦『折口信夫の記』中央公論社，1996年，126頁。
40)同上，142頁。
41)折口信夫には同性愛の問題が離れがたく付き纏うが，教育あるいは身体という視座から照射することによって，新たな折口信夫像を描き出すことが可能なのではないだろうか。
42)「平田国学の伝統」『折口信夫全集20』中央公論社，1996年，426頁。
43)「月曜通信」『柳田國男全集20』筑摩書房，1999年，38頁。
44)今野圓助「先生と師匠と」『定本柳田國男集』月報27，筑摩書房，1964年。
45)「古代研究」『折口信夫全集3』中央公論社，1995年，465-467頁。
46)加藤守雄『わが師　折口信夫』朝日文庫，1991年，193頁。
47)同上，193-194頁。
48)岡野弘彦『折口信夫の晩年』中公文庫，1977年，149頁。
49)岡野弘彦「二人の先生」『すばる』集英社，2004年2月号，241頁。
50)同上。
51)岡野弘彦『折口信夫の記』中央公論社，1996年，40頁。
52)「半生の目撃者」『折口信夫全集29』中央公論社，1997年，160頁。
53)同上。
54)「言語情調論」『折口信夫全集12』中央公論社，1996年，76頁。
55)村井紀『反折口信夫論』作品社，2004年，10頁。
56)「かたる」ことに関しては，言語論や物語研究をはじめとする先行研究が数多く存在する。しかし，「聴く」ことを主題的に扱った研究は，管見の限りそれほど多くはない。例えば，John Dewey『デューイ＝ミード著作集12　経験としての芸術』(人間の科学社，2003年)や，鷲田清一『「聴く」ことの力：臨床哲学試論』(TBSブリタニカ，1999年)などが挙げられる。今後はコミュニケーション論や身体論，特に身体の政治学を射程に入れた重層的な理論研究を展開する必要があるだろう。なお，本稿の執筆に際しては，主にメルロ＝ポンティ『知覚の現象学』(みすず書房，1967年)とヘルマン・シュミッツ『身体と感情の現象学』(産業図書，1986年)から多くの示唆を得たことを記しておく。

付記　引用に際しては，適宜，旧漢字を常用漢字に改めた。